

鞍馬獅子 (夫婦酒替ぬ中仲)

嵐の誘ふ花の雪

散れば狂じて柳髪

雪は飛んで散乱し

羽風に似たる白妙も

くるう狂女の姿かや

「その人に物問う妾が尋ぬる公達の

綾の狩衣たをやかに

十六七の細眉に

かね黒々と粧いし

お稚児の旅に逢うことの

若しやちらりと三日月ならば

教へてたべの里人と

うつゝ涙にわけもなき

「ヤ、何ぢやわが君様は鞍馬にぢや

鞍馬の里は八瀬大原

大原木可愛

大原女が

引く牛に

恋しき人をうちのせて

引いて行きましょわが故郷へ

大原木可愛

大原木可愛な

可愛いと鳴く鳥に

憎や添寝をおこした

「ホ、ホ、ホ、可笑し

いち足早う逃げていたかわらへ

妾も人が笑はなん

さもし恥かしこの姿

小春へ残る乱れ菊

とりなりうつす水鏡

みもすそ川や

八十瀬川

所は伊勢の神

神風につれて聞こゆる神楽歌

「悪魔を払つてそつこでせい

諸国めぐりに

天照す

神を商ふすぎはいに

襟に掛けたる曲太鼓

頭に獅子の二人まへ

一つによせて

打つたり舞うたり

月のついたち十五日

大晦日も元日も

股引がけの旅神楽

われと浮かる道草に

獅子の真似して

来りける

「コレコレ里人こへ来てたもや

太神楽はそばへ寄り

「イヨー見ればお若い女中の唯一人

お前方の様な美しいお方のそばへよつたならや

どんな太鼓の撥があたらうもしれぬ

「コレ、其方の背負うて居やるはそりや何ぢや

「エこれかへ、こりや獅子さ

「その獅子わらはに貸してたも

「エ、これを貸して呉れえ

これをお前に上げてはわしの鼻の下が干上がる

「そんならわが身舞うて見や

「合点がたんお望みに任せつゝさらば神楽を囃さうか

そも、神楽のその初め

天の岩戸の屏風の内の

天のうづめの魂膽に

神の

心をとりはやし

手練手管の真実に

〱 柁木のかづらよりかけて

枝垂かづら玉かづらながなき鳥の常間に

しつぽり汗を角兵衛獅子

〱 獅子はお家のてれつくでん

つくづく見れば

てんとたまらぬ品物め

〱 誰にこゝろの乱髪

どこの岩戸の睦言を

問はまほしやと寄添へば

〱 もとより狂気のうろく

長刀取って打ちかゝる

〱 おつとあぶない鼻の先

〱 受ける曲撥三尺の

劔にひやす業物は

これぞ千巻の玉鋒に

〱 追立てられて太神楽

逃げる拍子に狂う獅子

こなたは恋の物狂い

〱 狂うは獅子の冬牡丹

獅子とらでんの

どつくとも

あはで果なん

〱 わが夫の鞍馬の方と聞くものを

鞍馬の方はいづくぞと

〱 そこはかとなく

走れば走るうつゝなさ

止むる男を振袖に

払ふ羽袖やひるがへる

〱 賤の小田巻繰返し

昔を今に恋しさの

〱 恋には翼もあるものを

添うてゆきたや逢はせと

口説いつ泣いつ正体なく

〱 取絶られて太神楽

乗りかゝつたる灘の舟

寄辺兼にし風情なり。